大阪公立大学
Osaka Metropolitan University
学術情報リポジトリ

混血の農園主：「デジレの赤ん坊」における秩序

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-05-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 瀧野, 哲郎 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00002625

混血の農園主

――「デジレの赤ん坊」における秩序――

瀧野　哲郎

言語文化学研究（英米言語文化編）
２０１８・３　第13号抜刷
大阪府立大学人間社会システム科学研究科　言語文化学専攻

混血の農園主
――「デジレの赤ん坊」における秩序――

瀧　野　哲　郎

アンティベラム期のアメリカ南部において、農園主は、プランテーション（大農園）の秩序の維持に努めていた。当時、南部の経済的基盤は綿花生産であった。綿花は、南北戦争勃発前には合衆国の輸出額の半分を超えるまでになり、その生産の拡大を可能にしていたのが、黒人奴隷による労働力であった。農園主は、多数の奴隷を管理しなければならない。プランテーションの規律を保ち、奴隷の逃亡を防ぎ、綿花栽培を効率的におこなうためである。農園主は、プランテーション内で生活するものを家父長制的な「大きな家族」ととらえることがよくあった。自らが家父長のような存在となって頂点に立ち、妻子とともに使用人や奴隷を含めたすべての「面倒をみる」というのである。「大きな家族」ととらえることによって、プランテーションに秩序をもたらすことができると考えたのであろう。プランテーションの秩序維持は、富の蓄積を可能にするとともに、奴隷制社会の安定につながることでもあった。[1]

南北戦争前の奴隷制プランテーションを舞台にした文学作品の一つに、ケイト・ショパン（Kate O'Flaherty Chopin, 1850-1904）の短編小説「デジレの赤ん坊」（“Désirée's Baby”）がある。ルイジアナ州のプランテーションにおいて、農園主アーマン・オービニと妻デジレにおこる出来事についての話である。アーマンはフランスで生まれ育った。ルイジアナの農園主であった父が、フランスで母と出会い結婚したからである。８歳のとき母が他界すると、父にルイジアナに連れて来られる。成人したアーマンは、農園主となり、デジレと結婚する。デジレは、１歳のとき親に置き去りにされたが、ヴァルモンデ家で18年間娘のように育てられた。まもなくアーマンとデジレに男児が

誕生するが、その子が混血であることがわかる。アーマンはデジレに家から出ていくように命じ、絶望したデジレは赤ん坊を抱いて家を去り、命を絶つ。数か月後、アーマンは、かつて母が父に書いた手紙を見つける。そこには、母に黒人の血が流れていることが記されていた。アーマンは混血であったのである。[2]

この作品は、1894年、ケイト・ショパンの短編集『バイユーの人びと』（*Bayou Folk*）に収録され出版されたとき以来、「デジレの赤ん坊」というタイトルで知られている。だが、その前年『ヴォーグ』（*Vogue*）誌に掲載されたときのタイトルは、「デジレの赤ん坊の父親」（“The Father of Désirée’s Baby”）であった。このことから、デジレと赤ん坊だけでなく、父親アーマンにも作家がかなり注目していたことが窺える。たしかに、この作品には、奴隷制南部における女性の状況とともに、アーマンの境遇が如実に描き出されている。アーマンは、奴隷制プランテーションの秩序を維持する立場の農園主であるが、じつは混血であったのである。本稿では、奴隷制プランテーションにおける秩序という観点から、農園主アーマン・オービニが置かれた状況について考えてみたい。[3]

1

プランテーションにおいて、農園主はどのような立場にあったのであろうか。農園主には、プランテーションを管理し経営する能力が求められた。まず、プランテーション内の規律と秩序を保ち、綿花生産が順調に進むようにしなければならない。奴隷の管理を監督人にすべて任せてしまうのではなく、自らもプランテーションを見て回り、奴隷や作物の様子を確認することが大切である。そして、作物の収穫や価格について適切に対応しなければならない。ビジネスにかんする能力も重要なのである。機会があれば、土地や奴隷を増やし、綿花栽培を拡大して収益をあげることもできる。このような管理と経営の仕事に加えて、プランテーションの将来や家系の継承について考えること

も農園主にとって必要であった。もし跡継ぎがいなければ、土地や奴隷が競売などによって他人の手に渡ることにもなった。農園主にとって、結婚は、社会的・経済的安定を維持するために大きな意味があった。裕福で由緒ある家系の娘と結婚すれば、財産や地位を確固たるものにでき、さらに跡継ぎをつくることによって家系を存続させることができる。このような家系の継承を通して、農園主は、アンティベラム期の南部において政治と経済の権力を確かなものにしていった。だが、南北戦争の敗戦によって奴隷制プランテーションは消滅する。戦後、農園主のなかには、プランテーション経営を規模や形態をかえて継続したものもいた。これまで奴隷であった人たちをシェアクロッパー（小作人）として雇って労働力を確保し、綿花栽培を続け、ふたたび富と権力を取り戻したものも多かったのである。

農園主という仕事は、ケイト・ショパンにとって身近に感じられるものであった。奴隷州に生まれ育ち、15歳のときに敗戦を経験したケイトは、20歳のとき、農園主の息子オスカー・ショパンと結婚した。ショパン家は、ルイジアナ州北西部ナキトッシュ郡の町クルーチーヴィルで綿花プランテーションを経営し、長男オスカーは、綿花集積地であったニューオーリンズで綿花仲買業を営んでいた。結婚した二人は、ニューオーリンズで生活をはじめ、子ども６人をもうけたが、夫の事業が行き詰ったためクルーチーヴィルに移り住むことになった。この町の周辺には、広大な綿花プランテーションが多数あった。この地域は、レッド川とその支流ケイン川が流れ、土壌が肥沃で、綿花栽培には適した環境であった。戦前から、このあたりにはフランス系クレオールの人たちが多数住んでいて、綿花生産によって裕福な暮らしを送り、地域の上流階級を形成していた。ショパン家は、こういった富裕な家系の一つであった。ケイトがここに来たときは敗戦から15年が経過していたが、プランテーションの雰囲気は戦前とそれほど変わることはなかった。この地で夫オスカーは、小規模な綿花農園を経営し、雑貨店もはじめたが、３年後に病死する。ケイトは夫の仕事を引き継ぐことにする。綿花畑を見て回り、シェアクロッパーや仲買人

と交渉するなど、農園主の仕事をして生活を維持しようとしたのである。だが、結局1年半後、ケイトはセントルイスの実家に戻ることになった。このように、クルーチーヴィルでの経験は限られたものであったが、ケイトは、プランテーション社会での暮らし、そして農園主の仕事を身をもって知ることができたといえよう。そして、この経験が、のちに創作活動する際に彼女の想像力を刺激し、プランテーションや農園主がでてくる作品の執筆に役立ったと考えられる。[4]

短編小説「デジレの赤ん坊」には奴隷制プランテーションを所有するヴァルモンデ家とオービニ家が登場する。そのなかで、デジレを育てたヴァルモンデ氏、そしてアーマンの父オービニ氏の二人は、ともにフランス系クレオールの農園主であるが、奴隷制社会の秩序にたいする姿勢がかなり違っている。ヴァルモンデ氏は、「立派な石柱」のある邸宅で暮らし、堅実なものの考え方をする農園主であるといえよう。悩みがあるとすれば、妻との間に子どもがいないことである。門のところで赤ん坊のデジレを初めて抱き上げたとき、心が揺さぶられたにちがいない。デジレは、テキサスからの貧しい季節労働者に置き去りにされたと思われたが、身元がはっきりしない。ヴァルモンデ氏は、多少の心配もあったであろうが、デジレをこの家で育てることにする。デジレが「美しく、穏やかで、誠実で、優しい」(240) 女性に成長すると、この家の将来が明るくなるように感じられたであろう。そしてデジレの結婚は、ヴァルモンデ家の安定につながることであった。いずれ、この土地や財産をデジレと夫アーマンに託せるのである。このような思いとは別に、ヴァルモンデ氏は、デジレの出生については慎重にならざるをえない。結婚をまえにして、デジレの「曖昧な出自」を受け入れられるかをアーマンに確認している。また出産後、ヴァルモンデ夫人が赤ん坊の皮膚の「異変」(“changed” 241) に気づいたときの対応も慎重である。「異変」を乳母の態度によって確認するが、デジレには伝えない。帰宅した夫人から報告を受けたであろうヴァルモンデ氏は、何らかの対応をとることはない。さらに慎重さが見られるのが、デジレから「悲痛な手紙」が届いたときのヴァルモンデ家

の対応である。「赤ん坊を連れて家に戻って来なさい」(243) とだけ返事し、彼女が白人かどうかについては答えないのである。実際、ほんとうのことはわからないので仕方がないが、もし多少なりとも肯定的な返事をすれば、自殺をほのめかしていたデジレを救うことができたかもしれない。ただ、もしそのようなことをすれば、アーマンを窮地に追い込むことにもなってしまう。ヴァルモンデ氏は、デジレに訪れる不幸が予測できたとしても、オービニ家に混乱をもたらすようなことはしなかった。ヴァルモンデ氏は、大切に育てたデジレのことで辛い思いを味わうことになろうとも、農園主として、プランテーション社会の秩序を乱すことのないように努めたと考えられる。

奴隷制社会の秩序へのかかわり方が、ヴァルモンデ氏とはかなり異なるのがオービニ氏である。「ルイジアナ州では由緒ある誇り高い家系」でありながら、「気楽で、気ままな人生」(241) を送ったからである。プランテーション経営に真剣に取り組むことはなく、監督人に任せていたので、奴隷たちは農園主不在のなかで「陽気な」(243) 生活を送っていた。当時、農園主のなかには、プランテーションから得た収入で、ヨーロッパやアメリカの大都市で社交生活を楽しむものがいた。オービニ氏もそういった一人で、フランス系クレオールであったので、フランスに向かったのであろう。そしてその地で「黒人の血が流れている」(245) 女性と結婚し、子どもをもうけ、家族で暮らすようになった。ルイジアナに戻ることがあっても、妻を連れて帰ることはできない。「妻はフランスをたいへん気に入っているので、離れたがらない」(241) ということにして、妻子については詳しく語ることはない。また、オービニ氏と妻は、息子アーマンが「母に黒人の血が流れていることを、けっして知ることのないように」(245) していた。こうしてオービニ氏は、妻と息子が混血であることを隠し続けたのである。妻を亡くしたのち、アーマンをアメリカに連れてきたが、それは、父親として息子を育てようと思ったからかもしれない。あるいはいずれプランテーションの仕事を継いでもらいたいと思ったからかもしれない。アーマンは「浅黒い」(“dark” 242) 肌をしていたが、白人と

して通る程度であったので、ルイジアナで暮らすことができた。しかしながら、オービニ氏は、息子がいずれ結婚し子どもをつくる際、奴隷制社会ではどのような状況に置かれるかについてよく考えることはなかったのであろう。あまりにも「気楽」すぎる父親である。混血であることを息子に伝えないまま跡継ぎにしたからである。その事実が記された手紙を処分せずに引き出しに入れて置いたことも無責任である。もし他人に見つかれば、息子が困難な事態に追い込まれることになる。自由で「気ままな」農園主オービニ氏は、「由緒ある家系」の秩序を保つことなく、息子の行く末に暗雲をもたらすことになった。このように、農園主が秩序の維持に努めることがなければ、奴隷制プランテーションの安定と存続は容易ではないことが、オービニ氏の人生から見てとれるといえよう。

2

アンティベラム期の南部において、白人と黒人の間に生まれた混血はどのような状況に置かれたのであろうか。南部では、農園主が女性奴隷と関係をもち、子どもをつくることがよくあった。そして、このような関係は、奴隷制南部では黙認されることが多かった。生まれてきた混血の子は、難しい立場に置かれる。彼らは、農園主と妻との間に生まれた子とは異母兄弟の関係になり、そのため、互いに似ているところが当然でてくる。混血の子が屋敷内で働くことになれば、農園主の家族とのかかわりのなかで辛い思いを味わうこともあったであろう。なかには肌の色が白人に近い混血もいて、さらに農園主と混血奴隷との間に子どもが生まれると、ますます白人と黒人の境界線が曖昧になっていく。奴隷制社会にあって、混血は人種の区別を曖昧にし、人間関係を複雑にし、奴隷制の秩序を揺るがしかねない存在であったといえよう。

アメリカ南部で暮らしてきたケイト・ショパンにとって、混血は身近な存在であった。ケイトは、1850年、奴隷州であったミズーリ州の

セントルイスで生まれた。父トマス・オフラハティはアイルランド系の商人、母イライザはフランス系クレオールの家系という裕福な環境のなかで、幼いころから奴隷と接しながら育った。ケイトが誕生したとき、父トマスは４人の奴隷を所有していた。そのなかには、ケイトの面倒をみていた50歳の乳母、いつも小馬の世話をしていた奴隷もいた。ケイトが５歳のころ、家には４歳と１歳の混血の女児がいて、その母親である23歳の奴隷とともに暮らしていた。女児二人の父親が誰であるかは明らかではないが､ケイトの父トマスである可能性が高い。そうであれば、ケイトは、混血の異母姉妹二人と同じ家にいたことになる。ケイトが10歳のころ、奴隷は６人になり、うち３人は大人の黒人で、64歳の男性、28歳の女性、17歳の女性、あとの３人は混血の子どもで、さきほどの女児二人、そしてあらたに生まれた６か月の男児であった。この男児の父親についてもはっきりしたことはわからないが、父トマスは1855年に列車事故で亡くなっていたので、ケイトの異母兄あるいは叔父が父親ではないかと推測されている。当時の奴隷州では、混血の子どもは、奴隷を所有するほかの家でもよく見られたので、ケイトがその存在にとくに違和感をもつことはなかったかもしれない。だが、その存在が、多くの妻に不快感を与え、子どもに疑問を抱かせることはよくあった。混血の子の父親が誰であるかについて話されることはなく、混血の子も、自らの出生について知らされることはめったになかった。ケイトは、こういった環境で成長するうちに、混血の境遇を身近に感じとっていったと考えられる。

ケイト・ショパンは、「デジレの赤ん坊」のなかで３人の混血奴隷を登場させている。この３人は、農園主アーマンの近くにいる奴隷である。混血の乳母ザンドリンは、デジレのそばで赤ん坊の世話をしている。赤ん坊の「異変」に気づいてはいるが、そのことにはかかわらないようにしている。近くの奴隷小屋にいるラブランシュ（La Blanche）は、名前からわかるとおり白人のような肌をした女性奴隷である。アーマンとの関係は、かなり以前にはじまり、彼の結婚後も続き、この間混血の子どもが何人か（“little quadroon boys”）生まれ

ている。その息子の一人は、赤ん坊のそばで手伝いをしている。この奴隷少年と赤ん坊は、ともに父親がアーマンであるので、顔や肌の色が似ていても不思議ではない。デジレが「異変」に気づいたのは、そばにいたこの少年と赤ん坊を見比べたときであった。この３人の混血奴隷は、ほかの奴隷のように日の出から日没まで綿花畑で働くことはないが、「傲慢で過酷な」（242）主人アーマンの近くで、日々彼と接しながら仕事をしている。ただ、この３人については、この短編小説で詳しく描かれることはない。

アーマン・オービニは、農園主であるのに混血であったので、難しい状態に置かれている。この話において、アーマンがいつ混血であることに気づいたかについては明確に記されていない。話の最後に、アーマンが母親の手紙を「手に取って」「読む」（244）場面がある。以前に取って置いた手紙をふたたび読んでいるのかもしれない。だが、アーマンの立場であれば、出生の秘密が記された手紙を引き出しに入れて置くのはあまりにも危険である。やはり、あの場面で手紙を見つけ、混血という事実を知ったと考えられる。ただ、それ以前に、アーマンは自分自身について何の疑問も持つことはなかったのであろうか。まったくなかったというのは不自然なように思える。すなわち、母親の手紙を見つけたことで事実が明らかになったが、それ以前にアーマンは自分が混血かもしれないという不安を徐々に感じるになっていったと考えられるのである。[5]

では、アーマンの不安は、これまでどのようなものであったと考えられるであろうか。フランスで過ごした幼少期、両親からは混血の事実を告げられることはなかったので、それを意識することはほとんどなかったであろう。ただ、自分の「浅黒い」肌、母の肌、そして母が渡米しない理由などについて疑問に思うときがあったかもしれない。ルイジアナで暮らしはじめると、奴隷制社会では黒人や混血の扱われ方がフランスとは違うことに驚いたにちがいない。そして、多数の奴隷に接しながら暮らすなかで、自分や母のことで漠然とした不安を感じるようになったとしても不思議ではない。成人して父の跡を継いだ

アーマンは、奴隷制社会における農園主の立場を意識するにつれて、不安が増していったであろう。プランテーションを維持する立場にありながら、もし混血であればどうなるのか。アーマンの不安は、奴隷にたいする態度にあらわれているように思える。彼は奴隷にたいして過酷である。プランテーションの規律を保つためだけではなく、不安な気持ちを鞭打つことで打ち消そうとしたのかもしれない。混血奴隷ラブランシュとの関係においても彼の内面が見てとれるであろう。アーマンにとって、女性奴隷との関係は、安心できるものであった。生まれてくる子どもが混血であるのは、母親が奴隷であれば当然なのである。そして、アーマンの不安が如実にあらわれているのが、デジレを結婚相手に選んだことである。本来、由緒ある家系の跡継ぎであれば、それに見合った家柄の女性が望ましい。だが、不安なアーマンは、結婚には慎重にならざるをえない。そのようなとき、アーマンが「偶然見かけて」「夢中になった」のが、ヴァルモンデ家の石柱の前に立つデジレであった。アーマンは８歳のころからデジレのことを知っていたが、「不思議なことに」これまで何の関心も示さなかった。だが、このとき、デジレを見てひらめいたことがあったのでないだろうか。出自が曖昧なデジレであれば、結婚しても自分は安全である。万一混血の子が生まれても、自分が疑われる心配はない。跡継ぎづくりを試せる結婚相手がようやく見つかったので、「夢中になった」のかもしれない。実際、デジレに「夢中になって」からもラブランシュとの関係を続けているので、デジレへ思いにはそれほど「情熱」(240) があるようにも思えない。だがともかく、この結婚がアーマンに安心感と希望を与えたことはたしかである。そして、アーマンがようやく安堵できたのが、赤ん坊が誕生したときである。肌の色も大丈夫そうで、オービニ家の跡継ぎとなる男児が生まれたのである。アーマンは、まわりの人に優しくなり、「奴隷を鞭打つこともまったくなくなった」。こうして、結婚と跡継ぎ誕生は、アーマンの「傲慢で過酷な性格を驚くほどに和らげた」のである。農園主になって以来、彼がこれほど優しくなれたのは、不安が軽減したこのときだけであった

かもしれない。だが、このような状態は数か月しか続かず、アーマンはふたたび「悪魔に取りつかれたかのように」(242) 奴隷を扱うようになる。赤ん坊が混血であることがわかり、不安が限りなく膨れ上がったからであろう。赤ん坊が混血であれば、自分が混血である可能性が非常に高くなる。アーマンは大きな衝撃を受けたにちがいない。ここで彼は、赤ん坊の「異変」をすぐデジレに伝えることはせず、彼女との接触を避けようとする。あまりの絶望感に打ちのめされ、そして後ろめたさを感じ、とても自分から言い出すことができなかったのではないか。デジレが「異変」にようやく気づいて話してかけてきたとき、アーマンは「冷淡」で「残酷な」(243) ことばで「異変」の責任をデジレに押し付ける。そして、自分の身を守るために彼女を切り捨てることにしたのであろう。実家から届いた手紙を見せるデジレにたいして、「家から出ていけ」と「心を突き刺すように」命じ、最後には無言という「致命的な一撃」(244) を与えて、彼女を死に追いやった。もしデジレが自殺せずに生きていれば、いずれ彼にとって困る事態がでてくるかもしれない。不安にさいなまれるアーマンは、注意深く考え行動せざるをえない。こうして混血である可能性が高まったアーマンは、その数か月後、母の手紙によって、混血の事実を自分の目で確認することになる。跡継ぎをつくり家系を存続させようとしたアーマンであるが、今後はオービニ家最後の農園主として混血であることを隠して生きていかざるをえないであろう。奴隷制南部という人種の差異が決定的な違いをうむ社会において、混血かもしれないという不安は、アーマンの人生を大きく左右することになったと考えられるのである。

3

ケイト・ショパンが「デジレの赤ん坊」を執筆していたのは、南北戦争が終結してから四半世紀あまりが経過したころであった。当時、セントルイスで暮らしていたケイトは、原稿に向かいながら、これま

での人生を振り返っていたであろう。かつて家にいた奴隷たちの様子、クルーチーヴィルでの暮らし、母や祖母から聞いた昔の話などを思い起こし、奴隷制プランテーションの世界をイメージしたと考えられる。南部上流階級のなかで長年暮らし人びととかかわるうちに、ケイトが当時の彼らのものの見方や偏見を持つようになったとしても不思議ではない。当然、彼女の作品にもそのような見方は反映され、「デジレの赤ん坊」においても、ステレオタイプ的な人物描写となってあらわれているところがある。デジレは、夫に依存する妻として描かれ、つねにアーマンの顔色を窺い、指示に忠実に従っている。自分の幸せさえも夫次第である。ヴァルモンデ夫人は、状況を的確に見極めるが、自ら事を進めることはあまりない。夫に伝え判断を仰ぐことが必要であったのだろう。奴隷たちも、この二人と同様、農園主に支配されている。彼らは、従順で目立たない存在である。乳母のザンドリンはただ返事しかせず、ラブランシュは小屋に来るアーマンを受け入れざるをえず、その息子は「音を立てないようつま先で歩き」(243)、そして「そとの静かな畑」(244) では奴隷が黙々と綿花を摘んでいる。「デジレの赤ん坊」のなかの白人女性や奴隷は、農園主の権力のもとで無力な存在である。このようなステレオタイプ的描写の登場人物が多いなかで、アーマンは際立って複雑な人物である。奴隷制プランテーションという世界のなかで、彼は不安定な状態にあって苦悩し、いたって冷酷なのである。[6]

「デジレの赤ん坊」のなかで、アーマンの存在は、奴隷制社会の秩序という点において大事な意味があるように考えられる。農園主は、奴隷制プランテーションの秩序を維持する立場にあるが、一方、その農園主によってつくりだされた混血は、人種の境界線を曖昧にし、複雑な人間関係をつくり、奴隷制の秩序を揺るがしかねない存在である。農園主アーマンは、混血であるので、不安にさいなまれ、このさきオービニ家を存続させることができない。アーマンがこういった状況に陥ったのは、父親のオービニ氏が奴隷制社会の秩序にとらわれることない自由で「気まま」な生き方をしたからである。農園主によっ

てつくりだされた混血が農園主になることで、奴隷制プランテーションの秩序が揺らぎ、綻びはじめる状況が「デジレの赤ん坊」には描き出されているといえよう。混血の農園主アーマン・オービニは、まさに、こういった南部奴隷制の矛盾を体現する存在なのである。

注

1 当時の南部において、農園主が自らを家父長のような存在ととらえることはよくあった。James Henry Hammond, "To William Gilmore Simms," 2 Nov. 1862, *The Hammonds of Redcliffe*, ed. Carol Bleser (New York: Oxford Univ. Press, 1981), 110.

2 Kate Chopin, "Désirée's Baby," *The Complete Works of Kate Chopin*, ed. Per Seyersted (Baton Rouge: Louisiana State Univ. Press, 1969), 240-45. 白人と黒人との混血は、「ムラトー」「クワドルーン」「オクタルーン」などと区別される場合もあるが、本稿では、すべてを含めて「混血」とする。

3 ショパンの伝記的事実については、以下を参照。Per Seyersted, *Kate Chopin: A Critical Biography* (Baton Rouge: Louisiana State Univ. Press, 1969); Emily Toth, *Kate Chopin* (New York: William Morrow, 1990).

4 ケイト・ショパンの中編小説『過ち』(*At Fault*) には、ポストベラム期ルイジアナの女性農園主が登場する。

5 混血の登場人物にかんしては、以下を参照。Ellen Peel, "Semiotic Subversion in 'Désirée's Baby,'" *American Literature* 62 (1990): 223-37. アーマンは幼いころから混血の事実を知っていたとする見方もある。Margaret D. Bauer, "Armand Aubigny, Still Passing After All These Years: The Narrative Voice and Historical Context of 'Désirée's Baby,'" *Critical Essays on Kate Chopin*, ed. Alice Hall Petry (New York: G. K. Hall, 1996), 161.

6 ケイト・ショパンのステレオタイプ的な描写については、以下を参照。Emily Toth, "Kate Chopin and Literary Convention: 'Désirée's Baby,'" *Southern Studies* 20 (1981): 201-208; Helen Taylor, *Gender, Race, and Region in the Writings of Grace King, Ruth McEnery Stuart, and Kate Chopin* (Baton Rouge: Louisiana State Univ. Press, 1989), 138-203.